

上杉雅之(監修)

イラストでわかる人間発達学

評者 小塚直樹

札幌医科大学保健医療学部理学療法学科

ギリシャ神話に登場するスフィンクスは、「朝は四本足、昼は二本足、夕は三本足。この生き物は何か？」と旅人に問いかけたという。この有名な「なぞなぞの答え」は、人間である。人としての生活が始まる赤ちゃんの時期は背臥位から腹臥位へ、そしてやがて四つ這い(四本足)で移動しながら準備を整え起立から歩行(二本足)、長い人生を歩み老人になると杖歩行(三本足)になる。人間発達学とはまさしくこのような人生の夜明けから夕暮れまでに人が歩んだ歴史と特性を概観する学問である。

今回の書評のお仕事をいただき、現在出版されている理学療法士・作業療法士養成校の学生向けに出版されている人間発達学に関連する4種類の教科書を読み比べてみた。いずれも朝昼夕の生涯にわたる記載はあるのだが、生後数年、つまり朝の部分のボリュームが多い。本書も朝の部分に重きを置いた教科書に分類される。

本書は少なくとも3つのユニークな特徴を備えている。まずはタイトルが示すとおり、イラストが効果的に使用されている点であろう。イラストのみならず図表が多用されているが、それぞれが重要な意味を持っている。運動発達の経過をわかりやすく説明する場合に、苦勞するポイントがいくつかあるが、なかでも動作や運動方向などの説明に難渋する。本書では連続性のある動作を示したイラストを用い、重要な姿勢を表現し、姿勢変換運動のイラストでは、その運動方向をベクトルで示すことにより、その困難性を解決している。

次の特徴は感覚運動発達についての学習が促される点である。正常運動発達は神経系の発達により展開されていく規則性のある連鎖であることから、運動の発達には神経の成熟が密にかかわることを理解しなければならない。本書の要所では、マイルストンの変化とともに移り変わる反射、反応の関連を詳

説している。また体性感覚と運動発達との関連についても解説を加え、最終的には巻末の感覚運動発達ノートを用いて自主的な学習を促す配慮がある。感覚運動発達は、教員が必ず学生に問いかける内容であり、小児を診る理学療法士、作業療法士が熟知すべき内容である。ただ記憶するだけでは意味はないのだが、本書には感覚と運動の関連性に触れながら、自分でまとめる作業を挟むことによりクリニカルリーzingを育てる工夫が施されている。

運動発達の解説中に、脳性麻痺児やダウン症児(低緊張児)が示す病態運動学的な要素を添えた点も本書の重要な特徴である。代表的なマイルストーンを提示する部分では、正常な運動発達様式と脳性麻痺児や低緊張児が示すであろう典型的な運動様式を対比して説明している。

小児理学療法の経験が豊富な読者にとっては、内容的に物足りない感はあるだろう。だが本書のターゲットは臨床実習に向かう学生であり、理学療法士・作業療法士国家試験に向かう初学者である。このコンセプトが理解できれば、本書の切り口や随所にみられる工夫、構成は十分に納得ができる。

監修者はもちろんのこと執筆を担当された方たちは、国内外の新しい知見を多く吸収された新進気鋭の先生方である。多くの分担執筆者の視点を含みながらも、その方向性は錯綜することなくまさに正常な運動発達のように適正な方向と幅をもって解説されているといえよう。

教員にとって学生に伝えやすい教科書は、学生にとってわかりやすい教科書である。私にとって本書は、学生に伝えるに値する1冊となった。

B5判・292頁・2色刷
 定価：本体4,200円＋税
 医歯薬出版刊、2015年